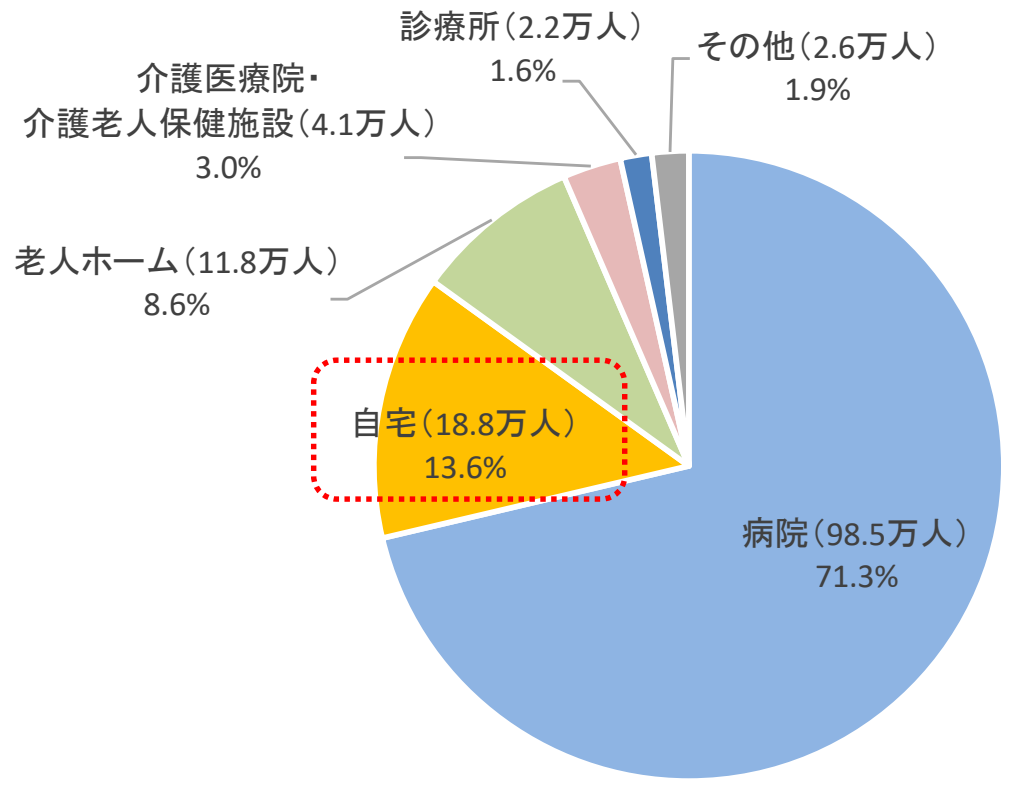


## (参考)死因別統計データ

---

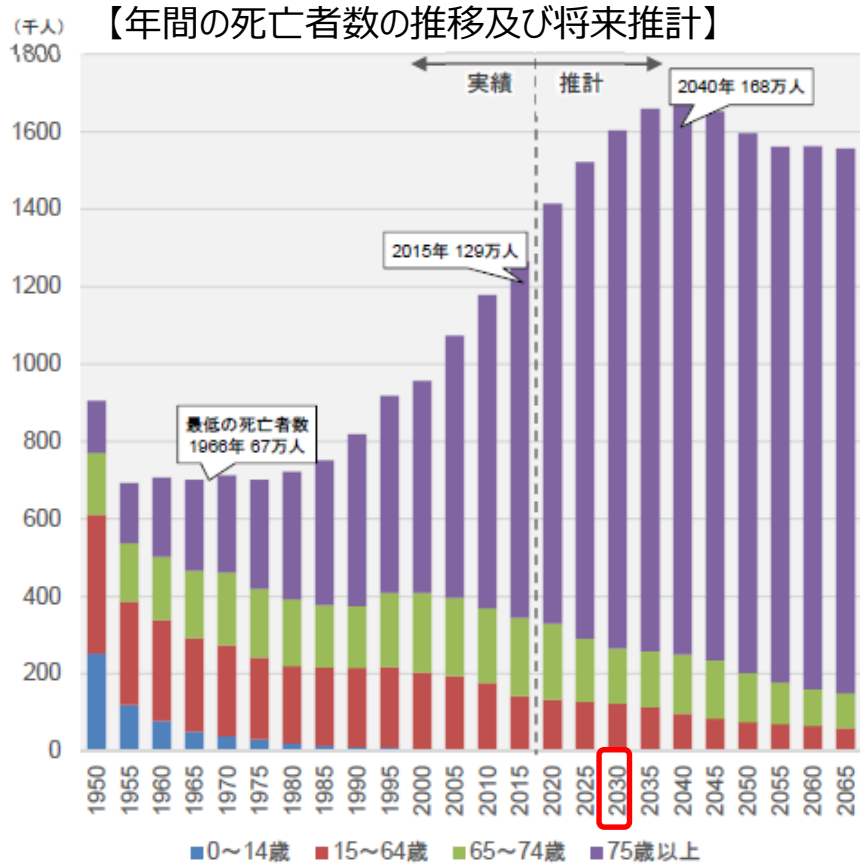
● 自宅での死亡者数（2019年）は18.8万人で、死亡者数全体（138.1万人）のうち、約14%を占めている。

【場所別の死亡者数（2019年）】



出典：厚生労働省「人口動態統計」より作成

- 死亡者数の増加が続き、2030年以降は年間150万人程度と見込まれている。
- 近年、病院での死亡割合が減少に転じ、自宅を含めた病院以外での死亡割合が増加傾向。  
 (自宅での死亡者数は、13.4万人(2000年)から18.8万人(2019年)へと約5万人増加)



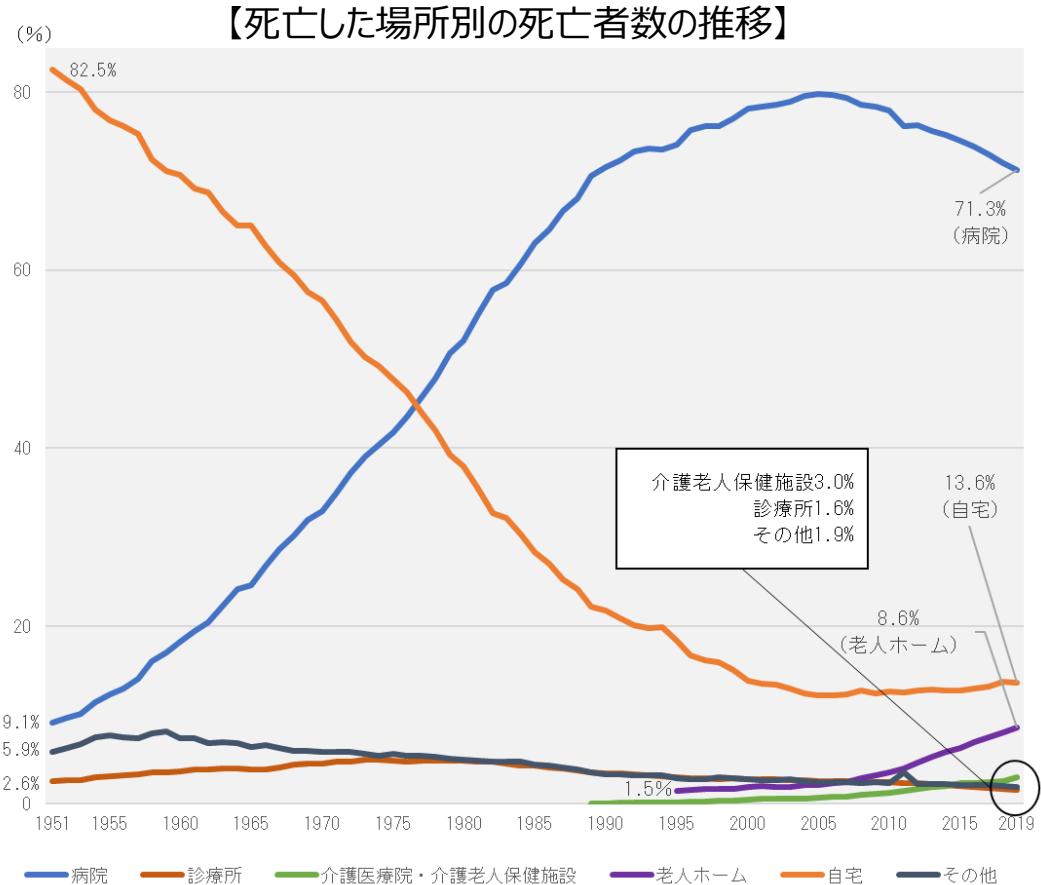
※2015年までの死亡者数には年齢不詳の者を含まない。

※2020年以降の推計は、出生中位(死亡中位)推計による。

出典 2015年までは厚生労働省「人口動態調査」

2020年から国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年度推計)」

出典:社会資本整備審議会 住宅地分科会 勉強会 第2回資料(令和2年1月)

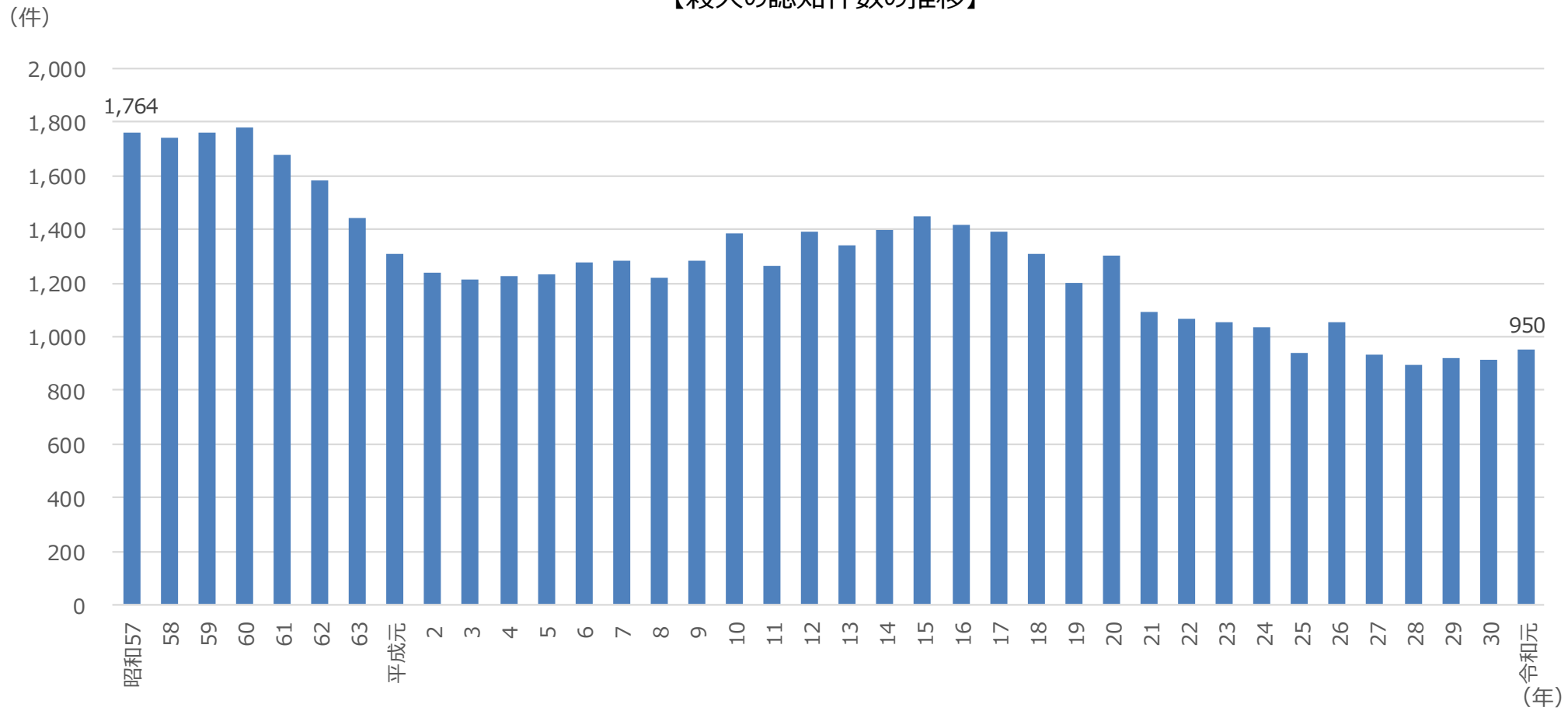


※1994年までは老人ホームでの死亡は、自宅に含まれている

出典 厚生労働省「人口動態調査」

● 殺人の認知件数は減少傾向にあり、直近では1,000件を下回る水準で推移している。

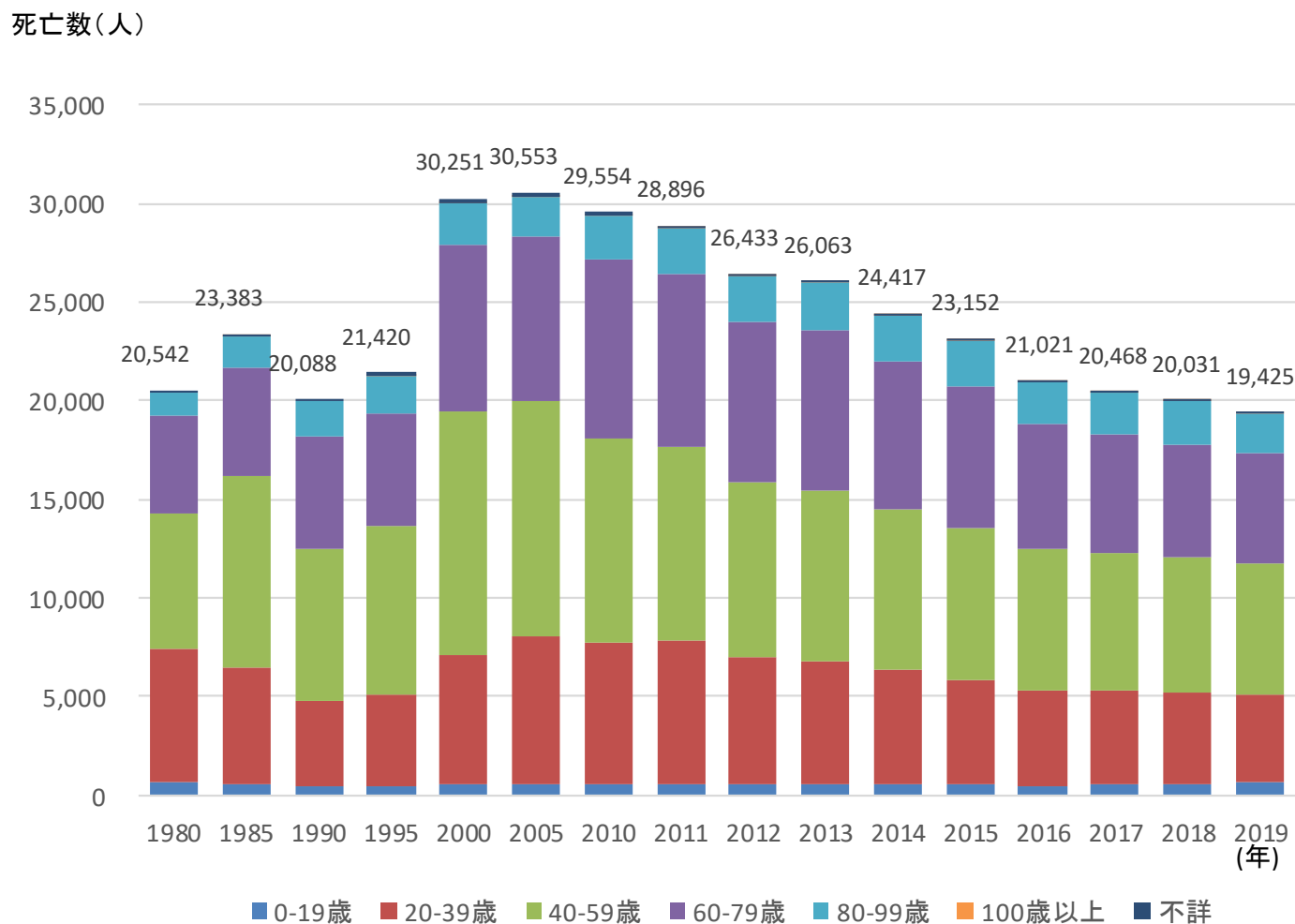
【殺人の認知件数の推移】



出典:警察庁 犯罪統計資料より作成

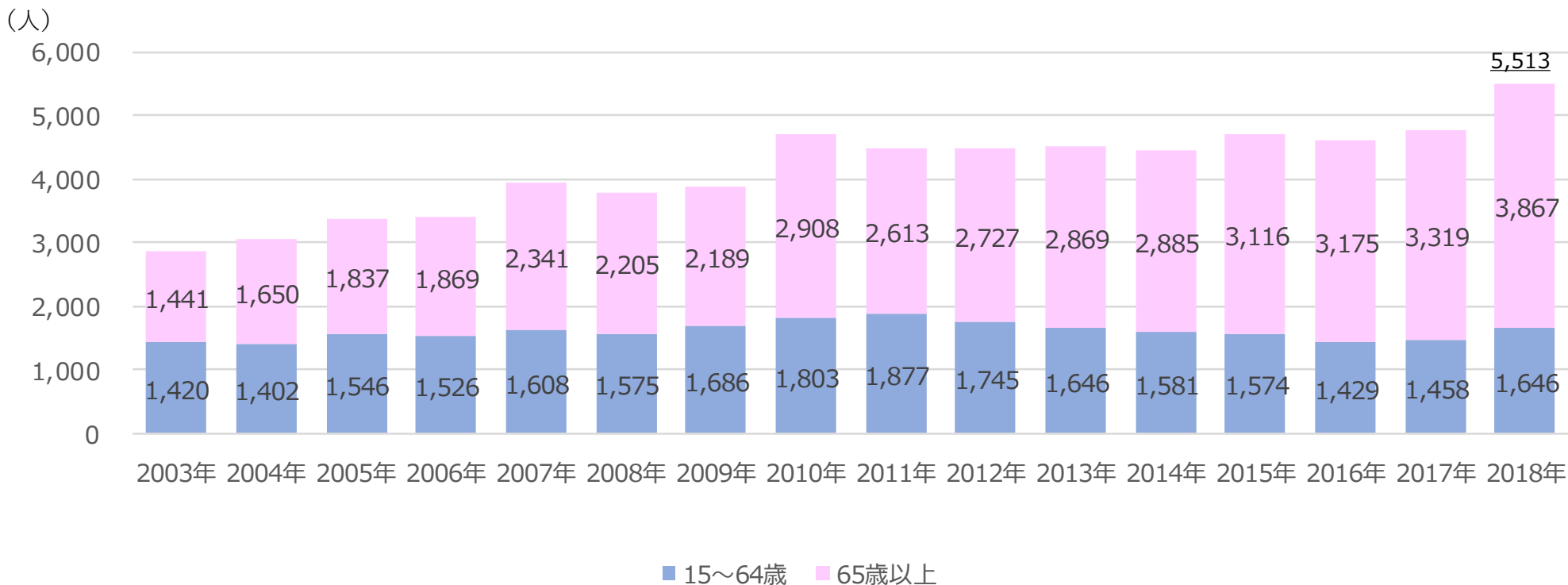
● 我が国の自殺者数は減少傾向にあり、2019年の自殺者数は約2万人となっている。

【年齢階級別自殺者数の推移】



- 東京都区部で発生した孤独死は増加傾向にあり、2018年は5,513件で、うち65歳以上は約7割（3,867件）となっている。

【東京都区部における年齢階級別の孤独死数の推移】



注1: 本データでは、孤独死を「異状死のうち、自宅で亡くなられた一人暮らしの人」と定義している。

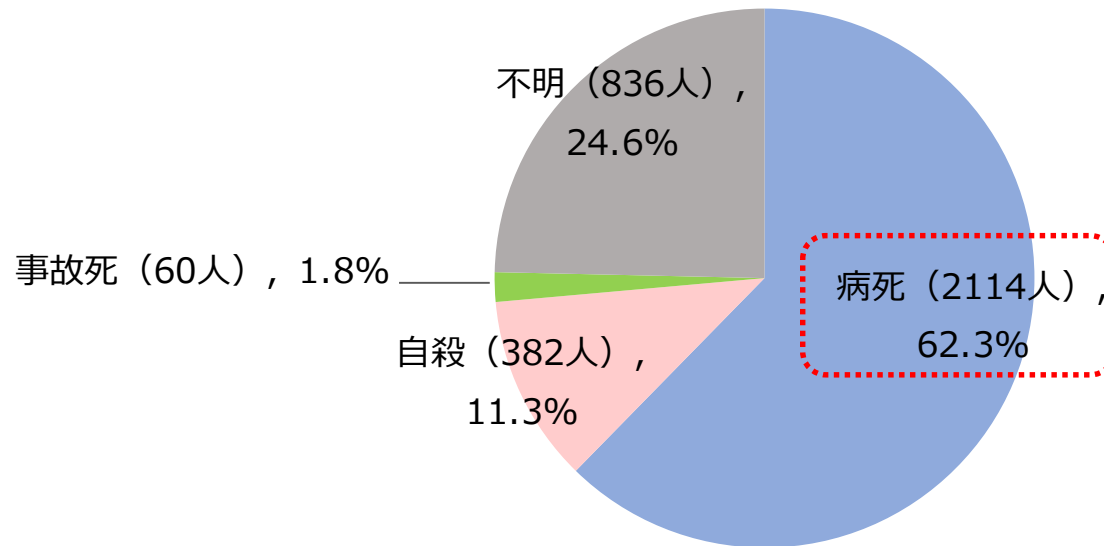
注2: 異状死は外因死(災害死)とその後遺症・続発症、自殺、他殺、内因か外因か死因が不明な死亡の事例であり、医師による病死との判断がなされず、事件・事故との関連が疑われ、警察署への届出が義務付けられている。

注3: なお、「0~14歳」に関しては、0件であったため(2003~2018年)グラフ非掲載としている。

出典: 東京都「東京都監察医務院で取り扱った自宅住居で亡くなった単身世帯の者の統計(平成30年)」より作成

- 民間データによれば、賃貸住宅での孤独死の死因は、病死が60%超と過半を占める。

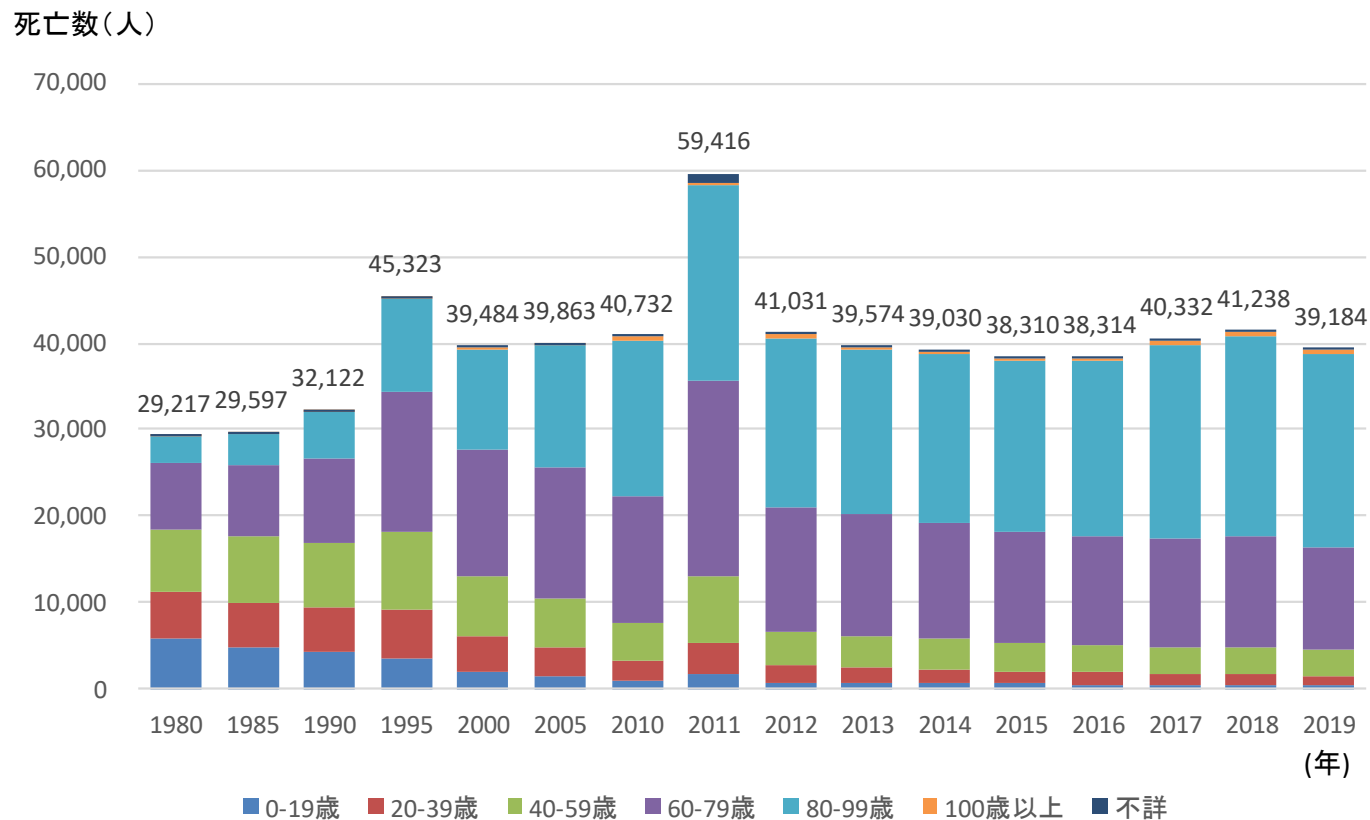
【死因別人数及び構成割合】



注釈: 孤独死の定義: 自宅内で死亡した事実が死後判明に至った1人暮らしの人  
対象: 少額短期保険会社の家財保険(孤独死特約付き)に加入している被保険者  
収集したデータ: 孤独死対策委員をはじめ、協力会社から提供された孤独死のデータ  
収集の対象期間: 2015年4月~2019年3月までの孤独死のデータ  
出典: 一般社団法人日本少額短期保険協会 孤独死対策委員会「第4回孤独死現状レポート」(2019年5月)より作成

●不慮の事故による死亡者数は、高齢者の割合が高まっている。

【年齢階級別にみた不慮の事故による死亡者数の推移】



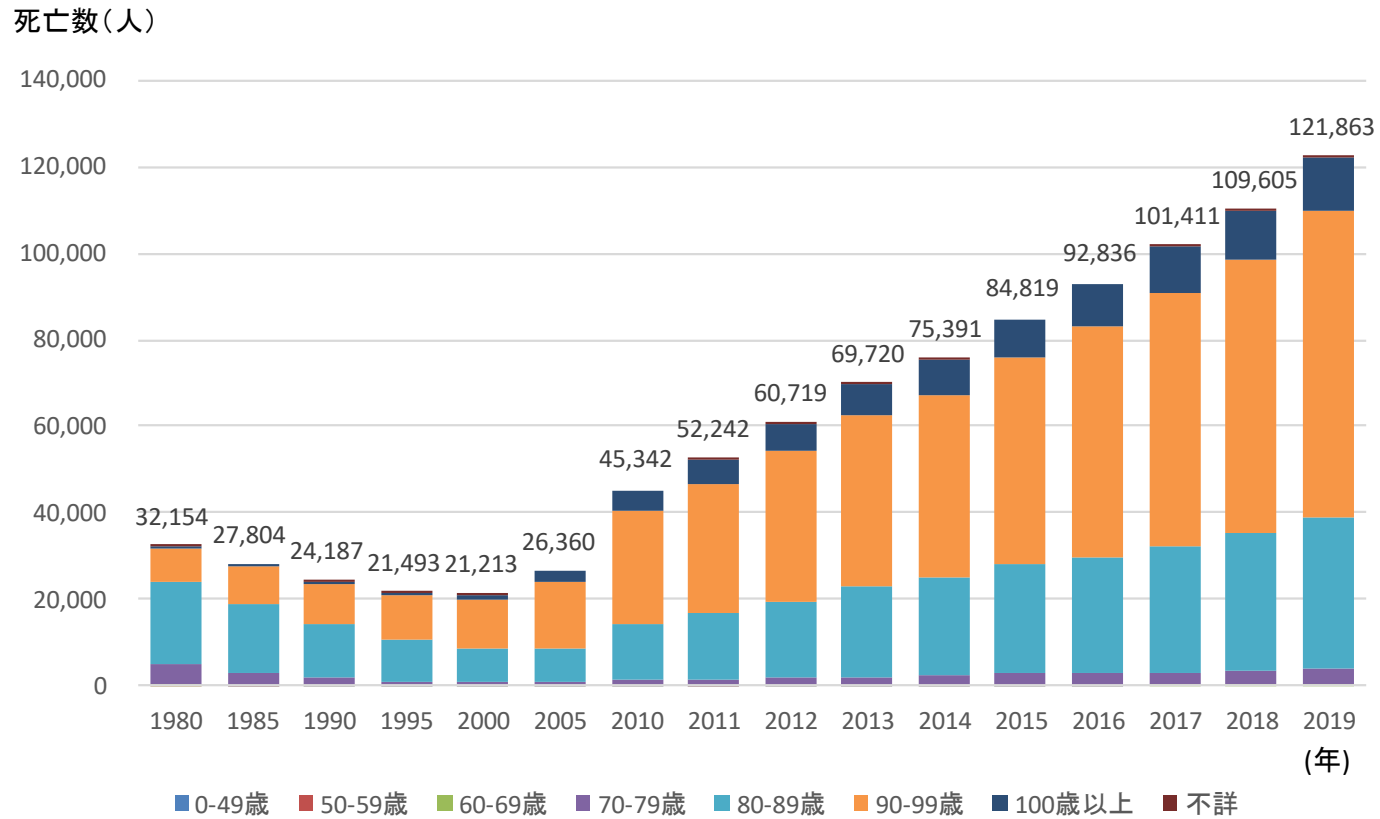
資料)厚生労働省「人口動態統計」より作成



# 老衰に関する統計データ

●老衰による死亡者数は年々増加している。

【年齢階級別にみた老衰による死亡者数の推移】

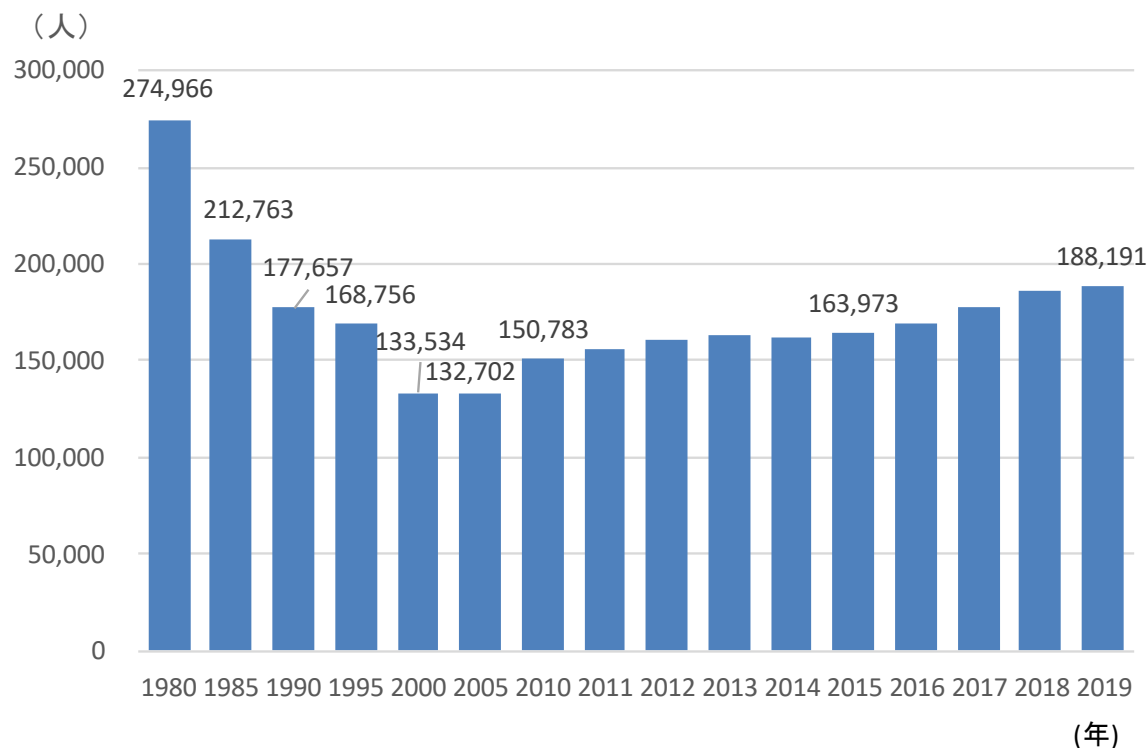


資料)厚生労働省「人口動態統計」より作成

# 自宅における死亡者数の推移

- 自宅における死亡者数は2000年以降増加傾向にある。
- 自宅における死亡者数について死因別にみると、老衰が1割弱、自殺が約5%、事故死（不慮の事故）が約4%、他殺は1%未満となっている。

【自宅における死亡者数の推移】



【自宅における死因別死亡者数】

	2019年	
総数	188,191	100%
症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの	31,432	16.7%
うち 老衰	17,561	9.3%
傷病及び死亡の外因	16,174	8.6%
うち 不慮の事故	6,642	3.5%
うち 自殺	8,363	4.4%
うち 他殺	130	0.1%